

Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

子どもと依存

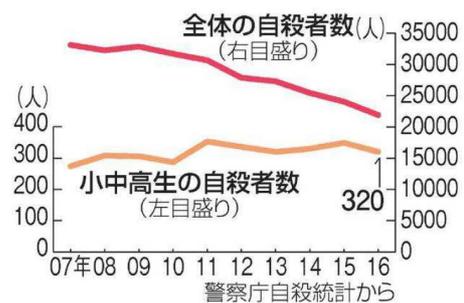
座間でおきた事件は近隣市であったということだけでなく、その猟奇性においても衝撃的なものがあった。9人という人数の人間が、狭いアパートの一室で殺され、しかも解体され、頭部などがクーラーボックスから発見されたとあっては、二の句が継げない凄惨さである。原因や動機が、納得いくものとして解明されることは決してあり得ないのではないかとさえ思う。昨年の7月には、相模原やまゆり園の事件があり、その時にもそう感じた。そして、両方の事件ともに、痛ましいばかりに、人の命が（しかも弱い人々が）軽くあつかわれていることと、犯人がまだ人生の入り口に立ったばかりの若者であることの共通点がとても気になるのだ。

今回の座間の事件についての報道を見ていると、加害者よりも、被害者に焦点が当てられている。つまり、いわゆる「ネット世界で自己表出する自殺志願者」である。死を望む若い人々の声がネットの中に充満しているという。とてつもない閉塞感と絶望を抱いている人たちが、実態として増えていることに間違いないのかもしれない。女子高校生も被害者の中にいたことをあえて取り上げるまでもなく、このことはきわめて深刻な状況にあるのだろう。日常の中では、直接そうした感情に生でぶつかることはあまりないことなのだが、たとえば、駅で「人身事故による列車の運休」の多さの中に、私たちがなんとなく気がついてはいることなのだ。

しかし、統計的に言うならば、毎年の全国の自殺者は減少している。ホームに防止柵をつくるまでに、明らかに列車の「人身事故」は増えていると感じることと、そのこととは矛盾している。統計の数字と、私たちの日常的な状況のとらえがずれているのだ。なぜだろう。

経済の行き詰まりを背景に、日本の自殺者が3万人を超えた頃と数年後の現在とでは、自殺をめぐる実態が、すでに微妙に変化し始めているのかもしれない。自殺者の数は減少しても、子どもの自殺は減ってはいないことが、そのことを物語っているようにも思う。

エナジードリンクをご存知だろうか。単純に言えば、元気が出る清涼飲料水である。清涼飲料水であるところが、医薬部外品であるドリンク剤とは違う。だから、子どもたちでもすぐに手に入る。それこそコーラと同じように身近におかれている。このエナジードリンクが、なぜ「元気が出る」のかというと、カフェインを多く含んでいるからだ。だから成分的には、眠気を吹き飛ばすドリンク剤と基本的には変わらない。



このエナジードリンクにはまり、飲み続ける中高生たちが増えている。おいしいから飲むのではない。明らかに、その「効用」を感じて飲むらしい。試験の前の日など、多い子どもだと1日に5～6本飲んでいるそうだ。もちろん個人差はあるものの、その結果、突然に心臓が痛くなる、飲んでいるときは活動的だが、飲まないときは気持ちが異常に沈み込むという症状に襲われる子どもたちが出始めている。また、夜、頭をすっきりさせてネット世界をのぞくために飲み、やっと生きている実感を得られる、と語る子どももいる。

パフォーマンスという言葉をよく耳にするようになったが、パフォーマンスを最高に維持するためにエナジードリンクを子どもたちが「使う」のである。そして、カフェインは依存へとつながる。そのために、エナジードリンクの子どもたちへの販売を法律で規制している国もあ

るくらいだ。もちろんそうした規制も大事なのかかもしれないが、そもそもなぜそんなに売れるのか。つまり、子どもたちが、なぜそんなにパフォーマンスを高いレベルに維持しなければならないのだろうか。そちらの方が問題ではないだろうか。気の抜けない競争へと駆り立て、子どもたちを依存へと追い込んでしまう社会になっているということだ。

依存といえば、エナジードリンクだけではない。もっと一般的なのが、ネット依存だ。つながり依存という言葉がちょっと前まで聞かれたが、状況はより進んでいるはずなのに、「依存」という言葉は使われなくなった。これは自然に使われなくなったのか、意図的にそうした言葉が使われなくなっているのか。どっちだろう？でも、ネット依存の問題が拡大していることには間違いない。教育ではなく、医療の側面からの「子どもの依存に関する治療」が必要になる時が、もうすぐ目の前に来ているような気がする。その時、それでも自己責任の論理で押し通そうとするのだろうか。それとも、社会の責任に起因すると、私たちは認めていくのだろうか。

教育の営みの中に包み込めない現実を、子どもたちは肌身で感じながら毎日を生き抜こうとしているのかかもしれない。エナジードリンクに頼りながらも・・・！

教育講演会への招待

これだけ急激に社会が変化していても、行き着こうとしている先が、我々が安心できる社会がイメージされているならば、私たちは慌てる必要はない。流れを楽しめばよいのだから。しかし、今現在起きていることの一つ一つを繋げて考えてみると、ひょっとしたらとんでもない方向に向かっているのかかもしれないという不安が迫ってくる。しかも、様々な意見が飛び交いはしても、かみ合っているようにも思えない。こうなると、私たちは一歩立ち止まって、多くのことに耳を傾け、私たち自身の判断をしっかりと下していかなければならない時を迎えている。教育が、政治の影響を受けないでいられることはないのだから。

Ed.ベンチャーの教育講演会では、子どもたちに残すべき未来のあり方を探ってきた。議論は「こうあるべきだ」というところまではなかなか到達しない。せいぜい、「このままではいけない」というレベルかもしれない。しかし、こうした議論を精一杯紡いでいくことが、私たちの未来への責任であると確信している。

憲法論議を軸に、現代社会の歴史的転換点を検証し、私たちの日々の生活と憲法とを重ねて考えるなかで、私たちが大切にすべきものはなにかを考えていきたい。

- 開催日時：2018年2月25日（日）14:00～17:00
- 講師：青井未帆（学習院大学教授・憲法学者）
- 講演テーマ：（この時代のわたしたちの）未来への責任
—憲法論議の先に見えるもの—
- 開催場所：大和市文化創造拠点SiRiUS 601会議室（定員100名）
- 参加費：一般1000円、学生500円（高校生以下無料）

これからの学習会 詳しくはHPをご覧ください

- 1月5日（金）教育講演会事前学習会 文献講読「憲法を守るのは誰か」
- 1月6-7日（連続講座）外国人の子ども理解のための学習会
- 1月18日（木）授業研究会（労働教育）
- 2月10日（土）ママ・パパのための学習会

【理事のつぶやき】『標的の島 風かたか』を見た。『標的の村』で脚光を浴びた三上智恵監督の最新作である。その映画に、辺野古移設反対の座り込みを続ける90代のおばあちゃんが出てくる。「座っても現実はず変わらず、結局、権力者の思うとおりになるのに、なぜ、座り続けるのか」という問いかけに、おばあちゃんは答える。「私がここに座っていたという事実は残る」と。ものすごく強いインパクトで説得された瞬間であった。そして、このように語る人がいる限り、自分も活動が継続できるのだと思えた。「おばあちゃん、ありがとう」（SMT）